湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所　属　保健医療学部　看護学科
名　前　伊藤ふみ子
作成日　2026 年 5 月 11 日

【目次】

１．教育の責任　・・・1

２．私の理念・目的　・・・3
　1）私の理念
　2）理念をもつに至った背景

３．教育の方法・戦略　・・・4
　1）対象を理解しようとする姿勢の育成
　2）自分の考え・行動を省察していく力の育成

４．学習成果　・・・5
　1）グループワークとプレゼンテーションで自らの力を育成
　2）臨地実習での体験を振り返り発展させる力を育成

５．改善のための努力　・・・6

６．今後の目標　・・・7
　１）短期目標
　２）長期目標

【添付資料】

1．教育の責任

本学は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」という建学の理念をもとに、看護実践力を養い地域社会に貢献できる看護職者を輩出することを目的としている。その中で、カリキュラムに沿って講義や演習・実習指導を行いながら、自ら考えて行動できる看護実践者を育成することが責務である。

1）令和８年度の担当科目について

令和 8 年度は、3 年次科目として「成人看護方法論Ⅱ」「ナーシングプロセスⅡ」「リハビリテーション看護論」「看護倫理」を担当している。また、4 年次科目として「統合実習」および「急性期看護実習」を担当している。

①「成人看護方法論Ⅱ」「ナーシングプロセスⅡ」「リハビリテーション看護論」について

「成人看護方法論Ⅱ」「ナーシングプロセスⅡ」「リハビリテーション看護論」の講義・演習では、病気をもちながら生活する人々を対象に、病期や健康状態、治療過程、生活背景に応じた看護を考える力の育成を目指している。学生が対象者を疾患だけで捉えるのではなく、その人の生活、価値観、家族背景、退院後の生活まで含めて理解できるよう支援している。また、根拠に基づいたアセスメントを行い、必要な看護援助を判断・実践できるよう、知識・技術・判断力を段階的に修得できる授業展開を心がけている。演習では、事例を用いて看護過程を展開し、情報収集、アセスメント、看護問題の明確化、看護計画立案へとつなげる力を養っている。さらに、「看護倫理」では、看護専門職として必要な倫理的感受性を高め、対象者の尊厳、意思決定、権利を尊重した行動がとれる人材の育成を目指している。学生が臨床場面で生じる倫理的課題に気づき、自ら考え、よりよい看護実践につなげられるよう支援している。

②実習科目について

急性期看護実習では、プレホスピタルケアとインホスピタルケアの二つの観点から、急性期にある対象者の状態を迅速かつ的確に把握し、生命の危機や病状の変化に対応できる看護実践能力の育成を目指している。急性期では、限られた時間の中で対象者の状態を観察し、異常の早期発見や優先順位を考えた看護判断が求められるため、学生がその特徴を理解できるよう指導している。また、急性期にある対象者だけでなく、不安を抱える家族への支援についても学べるようにしている。学生が治療中心の場面においても、対象者の思いや生活背景を意識し、身体的側面だけでなく心理的・社会的側面からも看護を考えられるよう支援している。

4 年次の統合実習では、成人期にある人々の健康問題を的確にアセスメントし、これまでに学修した知識・技術・態度を統合しながら、必要な看護支援を実践できる能力の育成を目指している。さらに、看護チームの一員としての役割を理解し、多職種との連携、継続看護、退院後の生活を見据えた支援についても学びを深められるよう指導している。

2）令和 8 年度の学科内委員会活動

①国家試験対策委員会

看護学科内国家試験対策委員として、学生たちが 4 年間の学修成果を看護師国家試験において十分に発揮できるよう、計画的かつ継続的な支援を行っていく。国家試験対策は、単に知識を詰め込むだけではなく、学生一人ひとりが自分の課題を把握し、主体的に学修を継続できるように支援することが重要である。そのため、模擬試験や小テストの結果を活用し、学生の理解度や学修状況を早期に把握する。特に成績が低迷している学生に対しては、個別面談や学修計画の確認を行い、苦手分野の克服や学修習慣の定着につながる支援を行っていく。また、教員間で学生の状況を共有し、学科全体で連携しながら支援体制を整える。学生が最後まで自信をもって学修に取り組み、看護師国家試験合格 100%を達成できるよう、継続的に取り組んでいきたい。

②学生支援委員会

学生支援委員会では、保護者会の運営や学園祭への支援、学生の学修環境の整備などを中心に活動している。学生が安心して学修に取り組み、充実した学生生活を送ることができるよう、教職員間で連携しながら支援を行っている。また、学生一人ひとりが学業だけでなく、大学生活を通して人間的にも成長できるよう、学生の声に耳を傾けながら、学修環境や学生支援体制の充実に努めている。保護者との連携を大切にしながら、学生が安心して大学生活を継続できる環境づくりを進めていきたい。

③就職支援プロジェクトチーム

就職支援プロジェクトチームの一員として、低学年の段階から計画的・継続的な就職支援を実施できるよう取り組んでいく。各学年のチューターと連携しながら、学生が自己分析を行い、自分の強みや課題、将来の目標を明確にできる機会を設けていく。また、学生一人ひとりが自分に合った就職先を選択できるよう、就職に関する情報提供や相談支援を行う。さらに、就職を単なる進路決定として捉えるのではなく、将来のキャリア形成につながる大切な過程として位置づけ、学生が主体的にキャリアアップを目指していけるよう支援していきたい。
就職支援プロジェクトチームの一員として、低学年から段階的継続的な就職支援を実施できるよう計画する。各学年チューターと連携し、学生達が自身に合った就職ができるよう自己分析の機会をもつ。学生達 1 人ひとりがキャリアアップを目指していけるような支援をしていく。

④神奈川県看護師等養成機関連絡協議会担当

神奈川県看護師等養成機関連絡協議会の担当として、神奈川県内の看護師等養成機関が実施する総会や会議に参加し、各養成機関との情報共有を行っている。今年度からは、教育課題推進部会の担当として、看護教育に関する課題や取り組みについて理解を深め、他機関との連携を図りながら、看護教員の資質向上に努めていきたい。また、得られた情報や学びを学内の教育活動にも活かし、看護教育の質の向上につなげていきたい。

3)チューター活動

4 年次チューターとして 14 名の学生を受け持ち、学修面や学生生活に関する個別支援を行っている。学生一人ひとりの状況を把握し、国家試験、就職、卒業後の看護師としての歩

みに向けて、必要な助言や支援を行っていきたい。また、学生が国家試験対策を「自分事」として捉え、主体的に学修に取り組めるよう、学生委員とも連携し、学年全体の学習意欲を高めていきたい。さらに、卒業後は新人看護師として臨床現場に出ていくことを見据え、知識や技術だけでなく、主体性、協調性、責任感、報告・連絡・相談などの社会人基礎力も育てていくことが重要である。学生が看護師としての第一歩を安心して踏み出し、困難に直面しても学び続けられる力を身につけられるよう支援していきたい。3 年次チューターとして 14 名の学生を受け持ち、学修や学生生活の指導を行っている。さらに、3 年次生国家試験対策を担当し、国家試験対策の模試や講座の運営をおこないつつ学力支援をおこなっている。また、学生が国家試験対策を自分事として捉えることができるよう、学生委員と連携して学年全体で学習意欲が向上するよう働きかける。

2. 私の理念・目的

1）私の理念

湘南医療大学看護学科の教育目的・目標、ディプロマポリシーに基づき、教育活動においては、以下の 3 点を目的としている。

①【人間の個を尊重できる力】

看護の対象者を生活者として捉え、尊厳を持った 1 人のかけがえのない存在として権利を擁護する力を養うことができる（患者に傾倒する力）。

②【エビデンスに基づく実践力】

あらゆる対象者の生活と健康課題を理解し、エビデンスに基づき、対象者に必要な看護支援を提供できる力を養うことができる（臨床判断能力の育成）。

③【チームで連携し協同する力】

各専門職の専門性や強みを尊重しあい協同して、対象や望む生き方や自己決定の支援をすることができる力を養うことができる。

※以上の 3 点の力を養うためには、学生が主体的に学び、自ら考え、判断し、行動する力を育成することが重要である。さらに、対象者にとっての最善とは何かを考え抜く姿勢を育てることで、知識・技術の修得にとどまらず、対象者の尊厳や意思を尊重した看護実践につなげていきたい。

2）理念をもつに至った背景

看護は、様々な場において人々の健康問題に関与して行きつづける役割を担っている。進展する少子高齢化社会、医療の高度化が進む現代において、人々が看護に求める役割は、増大し、看護の専門性も変化し続けている。2019 年度の指定規則の改正では、新たに専門職間協同、ICT、臨床判断の育成を目指した教育を含めることが示されている。これらに伴い、私たち看護基礎教育の現場において、今までの習慣から脱却し広い視座に立った看護に変革する必要性が求められている。また、看護教育の場において「看護職は専門職」であるという

認識を育成していくことであると考える。1つの領域に秀でた能力や知識を育成することではない。Styles.M の専門職の定義を基に勝原は、日本の看護職の専門性を5つの要素を挙げており、①社会的意義、②最高で最上の仕事へのコミットメント、③同僚性、集合性、④自己実現・自己成長、⑤倫理・道徳規範としている。私は、これらの5つの専門職の要素を改めて見直し、看護基礎教育携わる1人として看教育の場面において、教育者自らがこれらの5つの要素を意識し、学生に関わっていくことが大切であると考える。それは、対応する学生に真摯に向き合い、学生の持っている力を信じることを意味する。また、学生達が、知識と技術を駆使し、看護の提供の直前まで「最善とは何か」を考え抜く、考え続ける力を育成していきたいと考えている。

3. 教育の方法・戦略

1）対象を理解しようとする姿勢の育成

看護者は、対象者を生活者として捉え、対象者の健康問題を把握し看護展開してくためには、対象を理解することが求められる。対象を理解するためには、コミュニケーション能力を向上させていくことが重要となるが、現代の学生は多様な世代を関わる経験が乏しく、社会性の低下や人との関係性が希薄となっていると指摘さている。そのような学生にとっては、緊張を伴う臨床現場で初対面の患者との関わりの中で、対象理解や援助関係を深めていくことは容易ではない。そのため、演習等の授業の中で、シュミレーション教育という授業方法が展開されることが多い。シミュレーション教育は、リアリティを重視し臨床現場に近い学習環境を作ることで学生が状況や患者をイメージでき、臨床での実践能力の強化につなげることができるといわれている。また、模擬患者を活用することで、臨場感を持って患者の立場から有益なフィードバックが得られ達成感や満足感につながる。そのため、シュミレーション教育では、学生は看護のリアリティを疑似体験し、感情を揺さぶられ、学習姿勢が変化するという教育効果が報告されている。ナーシングプロセスII（3 年生科目）においても、シュミレーション教育の技法を活用して展開した。紙上事例患者（胃がんの手術を受けた患者の事例）の状況理解を深めるために、教員が患者役となり術後の状況を演じてもらい動画を作成した。学生の反応は、「術後の疼痛の変化や状態の変化がわかりやすい」との反応が聞かれ、対象理解に役立ったと考えらえる。また、術後 1 日目の看護計画の立案実践の場面では、教員が患者役となり看護師役の学生から立案した看護ケアを受けた。ケア展開では、デブリィーフィングや患者役の教員からのフィードバックもありも、学生は、緊張感のある中で考えたケアをより追加・修正する経験をすることができた。学生は、看護計画の実施・評価・修正の意味が理解できたとの反応を得ることができた。今後も、学生が対象理解や対象にあった看護展開について学習を深める経験積み上げることができるようシュミレーション教育の教育技法を活用した授業運営を行っていきたい。

2）自分の考え・行動を省察していく力の育成

Dewey（1938）は、人が学習するうえでは、単に経験するだけではなく、その経験を振り返り、

自分の行動や思考を言語化し、その時の判断や意味を再度考えることによって学びが深まると述べている。看護実践においても、省察は重要な学習過程である。学生が自分の行動や判断を振り返り、「なぜそのように考えたのか」「なぜその援助を選択したのか」「対象者にとってよりよい看護は何であったのか」を考えることは、看護実践力の育成につながる。

ナーシングプロセスⅡのシミュレーション学習においても、毎回の授業後に、学生自身が行った看護実践をグループで振り返る時間を設けている。学生は、自分の考えや行動を言葉にすることで、自分では気づかなかった課題に気づくことができる。また、他の学生の意見や教員からの助言を受けることで、異なる視点から看護を捉え直すことができ、思考の広がりにつながっている。

特に、看護過程の学習では、情報収集、アセスメント、看護問題の明確化、計画立案、実施、評価・修正という一連の流れを理解することが重要である。しかし、学生にとっては、自分のアセスメントや判断が適切であったかを客観的に振り返ることは難しい。そのため、授業内で意図的に省察の時間を設け、自分の思考過程やケアの根拠を確認できるよう支援している。また、自分の考えを他者に伝えることは、学生にとって大切な学習経験である。自分の考えを言語化することで、曖昧だった思考が整理され、他者からの意見やアドバイスを受けることで新たな気づきが生まれる。さらに、グループ内で意見交換を行うことにより、学生同士が互いに学び合い、看護に対する視野を広げることができる。今後も、講義・演習・実習の中で、学生が自分の考えや行動を振り返る機会を意図的に設けていきたい。省察を通して、学生が自らの学びや課題に気づき、次の学習や実践に活かすことができるよう支援していく。そして、学生が主体的に考え、判断し、行動できる看護職へと成長できるよう、継続的に関わっていきたい。

4. 学習成果

1）グループワークとプレゼンテーションで自らの考えを発信する力を育成

ナーシングプロセスⅡ（看護過程演習）では、「なぜそのように考えたか」「問題のどこに着目したか」といった思考の過程を重視した。教員は学生の発言を求めるように 問いに対し、「その場で」「自分で」考え、自分の言葉で意見を発信するできる機会時間をできる限り設けている。

●学生のコメント（リフレクションペーパより）

・自分ではしっかりと調べられていたと思っていたが先生の指摘のおかげでたくさんの疑問が見つかったため、まだまだ頑張ろうと思った。
・発表を行うことで他のグループの発表の良さを学ぶことができた。質問をもらうことでより学びを深めることができた。
・グループワークを行うことは、自分自身の振り返りや新たな学びの発見があり実りのある時間となっている。

2）臨地での体験を振り返り学びを発展させる力を育成

臨地実習（急性期看護実習）では、学生が既習の学習内容と臨地での看護実践を統合さ

せることができるような工夫をしている。病態の理解が進むように病態カンファの実施や臨地での体験をリフレクションし自らの看護実践の評価・修正ができるような時間を設けるようにしている。

●2025 年度授業評価アンケート結果

1）成人看護方法論Ⅱ

回答率は 72.87%であり、次年度は 90%を目指したい。履修動機は「必修だから」が多かったが、質問 4 の考え方、能力、知識、技術などが向上したか（4.41 点）、質問 7 の教員に熱意が感じられたか（4.53）を除く 11 項目については学科平均を上回る結果であった。

2）リハビリテーション看護論

授業については、「内容を理解したか」4.31、「教員の熱意は感じられたか」4.53、「教員は学習環境に配慮していたか」4.51 と以上 3 点は学科平均より高たかった。また、その他項目についても概ね学部平均に近い値であり、総合平均 4.36 と学科平均 4.42 と比較し大差はない。また、自由記述においても「全体的にわかりやすい、リハビリの各段階でどのような看護が必要か理解できた」とのポジティブな意見も多くみられ全体的に学生の満足のいく授業であったと言える。

3）急性期看護実習

指導体制についてはおおむね良い評価であったが、「教員と実習指導者の連携がとれていた」の項目で 5 点満点中 4.16 点であった。自由記述の評価を確認すると、教員と指導者での方針の違いに戸惑う意見や、他病棟指導者の不在による教員の関りの減少や指導者の固定を望む意見があった。今後は指導者と教員の指導方針の確認や病棟での指導体制の調整を重点的に実施していく必要がある。

5．改善のための努力

1）自分で考え、行動できる看護師を育成するための省察力の強化

学生が授業に主体的に取り組めるよう、講義内容を活用した課題解決学習やグループ学習を取り入れる。また、自分の考えや行動を振り返る省察の時間を意図的に設け、学生が自らの学びや課題に気づき、次の学習につなげられるよう支援していく。

2）事前・事後学習の工夫

授業での学びが深まるよう、事前・事後学習の内容を工夫し、授業と自己学習がつながるようにしていく。ここでいう自己学習とは、事前・事後学習だけでなく、自己の課題を解決するための学習や、実習を意識した自主的な学習も含む。

※以上の取り組みを進めるとともに、学生一人ひとりに真摯に向き合い、自分自身の教育方法の改善に向けて、具体的な実践を丁寧に積み重ねていきたい。また、学科全体で連携して取り組むべき科目があることを認識し、必要に応じて科目間連携を積極的に進め、授業内容の

充実と深化につなげていく。

6. 今後の目標

1）短期目標

① 学生が主体的に学び、自ら考え行動できるよう、省察を取り入れた授業方法を充実させる。
② シミュレーション教育や事例学習を活用し、対象理解や倫理的視点を深めることができる学習教材を開発する。
③ 学生が自己の課題に気づき、継続して学習に取り組めるよう、事前・事後学習および自主学習支援の工夫を行う。
④ 科目間連携を強化し、学生が学びを関連づけながら理解できる教育体制を整える。

2）長期目標

今後の臨床現場では、疾患や治療を理解する力だけでなく、対象者の尊厳や意思を尊重しながら、状況に応じて考え、判断し、行動できる看護実践力の育成が求められている。領域横断で実施している新カリキュラムにおいても、学生が対象者の状態変化に気づき、その気づきを根拠に基づく臨床判断へとつなげ、さらに対象者にとって必要な看護実践へ発展させていく力を育てることが重要である。そのためには、シミュレーション教育を単なる技術練習として行うのではなく、対象者の思いや生活背景、倫理的課題を考える学習機会として位置づける必要がある。学生が「なぜこの援助が必要なのか」「対象者にとっての最善は何か」を考えながら実践し、その後の省察を通して、自分の判断や行動を見つめ直す力を育てていきたい。

【添付資料】
資料 1：シラバス
資料 2：授業評価アンケート結果